

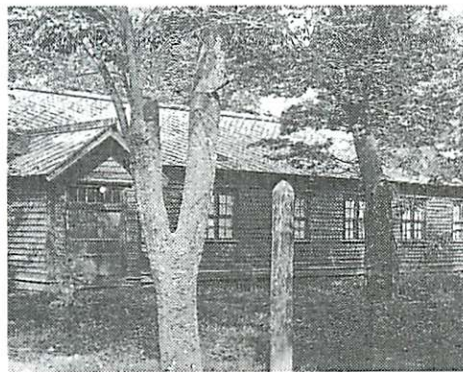
# 北の文化

北海道大学の学生寮と言えはたいの一方は「恵迪寮」の名が思い浮かぶかもしれないが、この大学管理の公設寄宿舍のほかに、私設寮が多数あったことはあまり知られていないだろう。そのひとつ「青年寄宿舍」の日記などの資料を、私を含む寄宿舍OBらがまとめ、『宮部金吾と舎生たち 青年寄宿舍107年の日記に見る北大生』（北海道大学出版会）として先月刊行した。青年寄宿舍は、北大の私設寮の草分けであり他にはない存在だった。その歴史は恵迪寮が誕生した1907（明治40）年よりも前に始まった。



## 宮部金吾と青年寄宿舍

所 伸一 北海道大学名誉教授



昭和初期の青年寄宿舍

から集まる若者の窮状を見かねて、農学校の基督教青年会に集う学生有志が、民家を借り上げて98年に立ち上げたのが青年寄宿舍だった。東京の神田学生街でも似たような宿舎づくりが知られている。だが札幌では、農学校生のために宮部金吾教授（1860〜1951）が監督を引き受けたことで、独自の経験が生み出されることになった。宮部は設立から1年余の1900年3月、学生の風紀の乱れをただすために「禁酒禁煙」を舎則とした。そして北5条西9丁目の農学校付属地を借りて、市民の寄付金をもとに同年7月に新舎屋を完成させた。宮部は敬虔なクリスチャンだったが、建設の

## 心血注ぎ学生育てた私設寮

借財を完済すると寄宿舍を基督教青年会から独立させ、舎内では宗教教育を行わないこととしたのである。



宮部は内村鑑三、新渡戸稲造と共に札幌農学校出身の「三秀才」と称される植物学の学者だが、自伝の中で研究室と独立教会と青年寄宿舍の三つが生涯の主たる生活サークルであったと記したように、寄宿舍には50年近くの間、舎長として心血を注いだ。彼は慈父のごとく学生に接し、自治・自律を大事にし、精神を集中して勉強する必要や自制心ある生活態度（Control appetites）を説き続けた。

こうした自治と訓育の結果、舎生たちは自由に物を考え節度を保ちながら「よく学び、よく遊ぶ」学生生活を送り、多彩な能力を有する人材へと育っていった。そして特筆すべきは、彼らが舎の日記を知性とウィットに富んだスタイルで書き継いだことである。戦前の言論の自由に制約があった時代にあっても、舎内の月次会などの集まりで学生たちが語った時局批判や大学の授業批判などを書き残した。

たとえば27（昭和2）年6月18日には、舎生が「我々は大学現在の教授法の大多数に不満を抱く。それは真実に、熱心に教えるという事なくただ単なる古くさいノートの朗読だからだ」と演説し、同席の先輩や宮部からたしなめられたとの記述がある。また戦時中の44（昭和19）年1月29日には「最近の全体主義に対する大体の批判と自由主義に現今なお取り入るべき点多々ある」「真の自由主義に徹すべし」との主張が出たことなどが記録されている。

設立以来のそんな日記が60余冊残されている。北大周辺には県人会など民間団体による私設寮が1930年代には12寮まで増えたが、このような記録を残したところはない。

その青年寄宿舍も、社会の変化には抗することが出来ず2005年に閉舎となった。しかし寄宿舍のOBたちは、誇るべき経験からの教訓は多くの方々と共有されるべきだと考えている。

◇ 1948年、足寄町出身。元北大教育学部長、現東北大学客員教授。共著に『ペレストロイカと教育』（大月書店）など。

「朝日新聞」札幌支社（〒060-0811）電話（011）231-1111（受付時間）10時～17時、夜間急用センター（011）231-1111（24時間）

ほっかいどう